

## きれいで静かな町

李 响

日本語・日本文化研修生 中国

「和歌山はどうですか。」「景色がとてもきれいです。」景色がきれいなところ、それは私の先生の話から初めて知った和歌山のことだ。しかし、和歌山に住んでみたら、ここはきれいなだけでないことにも気付いた。

中国の都会で生まれ、それからの 20 年間もそこで成長してきた私は、実は小さいころからずっと海や山に憧れていたのだ。黄色い砂を踏み、少し潮の香りが混ざる海風を感じたり、緑に囲まれた道を歩き、すがすがしい空気を吸ったりするのは、無上の楽しみではないかと思っている。ついに、そのような思いを抱き、海や山を備える和歌山に来た。

関空からのリムジンバスに乗り、窓から道ばたの景色を見て胸がわくわくせずにはいられなかった。それは海と山にこんなに近いのは自分の人生にはめったにないことだったからだ。

和歌山大学は山の上に建っている。それは、毎日の通学が山を登るという大変なことを意味している。だが、幸いなことに、学校のとなり、同じく山の上に住むことになった。住んでいるマンションが高いところにあるから、いつでも窓から遠いところの海も山も見える。そわそわするときには外を見れば、すぐ落ち着ける。



いつも山の上で生活しているので、海に近づく機会がなかなかなかったが、ようやく今年の 5 月、和歌祭の舞姫に参加するため、和歌浦にある木村屋という旅館に練習しに行けた。その旅館は海のすぐとなりだった。窓を開けたままで、海の匂いを嗅ぎ、海風を吹かれ、波が砂浜に押し寄せる音を聞き、練習の気分も上がったのだ。

海と山を備え、景色がきれいなところが私の目を見た和歌山だ。



都会の騒がしさに慣れた私には、和歌山の町が不思議に思われた。なぜなら、和歌山は静かだからだ。しかし、この静かさはただひっそりとするのではなく、生き生きしている静かさなのだ。

大阪と比べ、和歌山で毎日出会う人は少ないが、一人一人が生活を楽しめる息吹に満ちているのだ。わたしが来たばかりのとき、道をたどり、のんびりしてまわりの建物や風景を見ながら散歩することが多かった。そこで会った人たちはよく健康のために走ったり、ワンちゃんと散歩したりする。皆は一言も言わないが、彼達の表情から幸福感が見られ、周囲の空気にも生活の活気が浮かんでいるのだ。

また、私は互いに知らない人とは話さず、黙ってすれ違うのが一般的なことだと思っていたが、和歌山はそうではなかった。私が家から出入りする際、ときどき違う階に住んでいる中年の人と会う。そのとき、よく向こうからにこにこしながら、「おはようございます」などの挨拶をしてくれる。このように、静かな街からあいさつの声が出、そしてまたその静かさに戻るが、前とは明らかに違って、そこには温かさに溢れる雰囲気があるのだ。

また、人だけでなく、動物や植物も自分の活気を人々に見せている。春の桜、秋の紅葉、夜のせみしぐれ、夜明けの「テッペンカケタカ」、どちらでも自然の恵みで生き生きしている光景だ。通学途中、スズメなどの鳥が飛びまわったり、柵に留まったりするのもよく見かける。それがコチョウや蜂が花畑の間に舞う姿と合わせてみると、まるで自然がすばらしい絵を描いているようだ。

私は、このような静かなところで生活し、体も心も癒されたのだ。そして、自然の懷に抱かれて暮らすのが最高なのではないかと思っている。

静かだが、生き生きしているところ、それが私が感じた和歌山だ。

和歌山での留学生活はもう半年経った。毎度違う日本人と会うたびに、いつも同じ言葉をかけられる。「和歌山はどうですか。」と。来たばかりの私はきっと茫然としたが、今の私なら、こう答える。「和歌山は景色がきれいなだけでなく、活気がある静かなところですよ。」